

平成14年度  
 特別展

備前四十八ヶ寺 ～近世備前の霊場と  
 報恩大師信仰～を終えて

平成15年1月31日から3月2日にかけて、14年度2回目の特別展「備前四十八ヶ寺～近世備前の霊場と報恩大師信仰～」を開催しました。全館のスペースには、平安時代前期から近世末期まで約一千年にわたる彫刻・絵画・文書・書跡・考古遺品などの歴史資料160点余りが集まりました。全点を集中して御観覧頂くには、ちょっと多かったかもしれません。

「備前四十八ヶ寺」という言葉は、岡山県の寺院史に興味をお持ちの方なら、これまでもたびたび耳にされたことと思います。寺院巡りの時、境内の「当寺の由来」を書いた看板文に見いだした御経験もあるでしょう。そこには、だいたい次の様なことが記されています。「当寺は、奈良時代の高僧報恩大師が、天皇の御病気を加持平癒なさった暁に、備前国内に建立することを許された備前四十八ヶ寺の一つであり、…云々と。近代以降の地方誌にも、これらの寺院については「奈良時代、報恩大師の建立と伝える」という記述が当たり前のように書かれているのです。

「備前四十八ヶ寺」に数えられる寺々は、地域的には、北は加茂川町から南は牛窓町、東は備前市の東端から西は岡山市内という広い地域に分布しております。また、宗派についても近世以前から日蓮宗、真言宗、天台宗とさまざまであります。正直なところ一人の僧が開創あるいは中興したとは思われません。しかし、四十八ヶ寺にあげられた寺院が、備前地方に古代以来存在していたことは確実のようです。

備前四十八ヶ寺という寺院のまとまりは、いつごろ、またどうして形成されたのか、報恩大師の伝承とどう関わっているのか、そんな疑問に少しでも糸口が見つけられないかとの思いから展覧会は企画されました。

博物館や美術館での展覧会は、展示の可能な資料によって構成します。「備前四十八ヶ寺」という伝承を、どう実物資料と結びつけていくのか、この寺院集団をどう説明していくのか、なかなか困難な作業となりました。「伝承」と実際に存在する「もの」は、なかなか期待しているようには相性良く適合してくれるものではありません。けれども「伝承」には「伝承」が生まれる背景があり、「もの」には「もの」が創造され伝えられてきた理由があります。「もの」から伝承の背景をさぐり推測するのも、実物資料を目の前にする展覧会

ならではの楽しい作業ではないでしょうか。この展覧会では、より多様な観点から推測して頂けるように、多分野にわたる資料を御覧いただきました。そして、資料の持つ美しさや力強さ、時代に特有の雰囲気、風(ふう)といったものにふれていただきたかったのです。

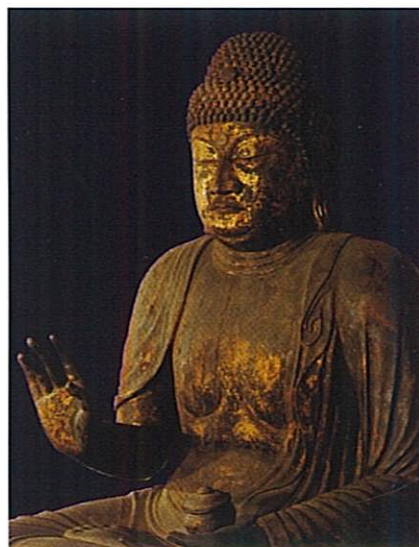
資料は、様々なことを語りかけてくれました。報恩の伝承は、すでに平安時代から備前地方に存在していたこと、四十八ヶ寺の全てが報恩伝承と結びつくわけではないこと、「四十八ヶ寺」の呼称は、おそらく16世紀後半に生まれたらしいこと、戦国時代の終結期に備前の覇者となった宇喜多氏の庇護を受けた寺々と備前国天台宗寺院の中心であった金山寺の結びつきが「四十八ヶ寺」形成の根幹らしいことなどです。

さらには、平安貴族の信仰をうかがわせる観音菩薩像・薬師如来像、鎌倉・南北朝期の阿弥陀来迎図、江戸中期以降の庶民による「四十八ヶ寺」巡礼の記録など、今後の研究を待つことが再認識された資料も少なくありません。

展覧会では、重要文化財5点、県指定重要文化財7点を含む優れた仏像作品を初め、県下を代表する古文書群である「金山寺文書」「弘法寺文書」「和気安養寺文書」「西大寺文書」が一堂に揃いました。また、半数以上の作品が今回初公開といえるものでした。

調査に関して、また御出陳について、多くの方々の御協力・御厚意を賜り、また御教示・御指導をいただき、やっと実現できたように思います。ここに心よりお礼申し上げます。

(学芸員  
 中田 利枝子)



重要文化財  
 薬師如来坐像  
 (邑久町餘慶寺蔵)  
 平安時代前期の作。  
 今回、門外初公開となった半丈六の坐像。威厳にみちた力強い造形は、県下仏像彫刻の白眉である。



## 退職にあたって

前副館長 白井洋輔

今年の2月12日であったと思うが、所ジョージの番組「笑ってこらえて・幼稚園の旅」を見る機会があった。小さな園児に見合いをさせている番組であった。

えーっこんなことを何の躊躇もなくすかさずというか、立て板に水的なことを平気で言うこましゃくれた子どもがいるのかいということに驚かされた。女の子と男の子が2つの座卓を並べて間に仕切としてのパネルを置いている。女の子にどんな子が理想かと尋ねたら、「目の細い子」と言っていた。さらに次へ進行し、パネルを取りはずすと、男の子は目をわざと細めていたのではないか。また男の子がペットボトルのキャップをはじいて、女の子の所へ飛ばす。女の子が同様に真似て返したら、テーブルのパネルを置いていた隙間に落ちてはまってしまった。間髪を入れず、「嫌な予感！」と男児が発した。

大人のような子どもに啞然とするばかりであった。私はその子個人を云々しているのではなく現象として見たのである。

逆に一方で大人になれない子供も社会に溢れていることは確かである。こましゃくれた子供がいる一方で活字離れ、漢字が書けない大学生がいる。また育児放棄がある一方で、親離れ、子離れが出来ないでいる。実はもしかするとこの極端の現象は同じ根に繋がっているのではないだろうかと思うのである。

猛烈な変化の時代に必死で追いつくために、スピード優先的に現象対応を早めた教育があり、反面その年齢のステージにはそれにふさわしい内容があって、教育は目先に惑わされず原理原点を死守すべきなのに、そのことを見失ってズレてしまっていることからちぐはぐさの全てが来ている現象ではなからうか。

小さな子供が大人のような口を利けば喜ばない親は確かにいない。しかし大人になれない子供達は決して利発でないからではなく、実は利発と思われている子も予備軍なのである。ステップを踏めていないからこうなるのではないか。子供の時、子供らしくないから、次のステップに行けないとすれば、教育も博物館が軸足を置く社会教育も少し考えなければならない。特に最近スピードと目先の刺激を与えるばかりが、教育ではないような気がしている。博物館は難しい世の中や

歴史を原理原点のように仕組みを分かりやすく示しているところであり、文化の原理原点とか、ある意味では文化の道徳教育的側面がある。その博物館も今危ない。

大人びた子供の現象を見ても、それは思考の幅が広いことからくるものではなく、黒か白のデジタル現象に慣れた条件反射に過ぎないのであり、個性豊かさというものとは全く逆なのである。私たちは刺激と反応に驚かされてはいるが、感動しているのではない。心に染み込む感動を大切にすることを粗末にしていたり、時代の進むスピードが早いからといって、それに合わせて進化、変化したものだけを喜んでいて「心の大きな不良債権」として、将来にツケを残すかも知れない。大人のような子供を喜び、その子が反応するままに、メニューを先回りして与えるパターンを教育に当てはめていくことを恐れる。英才教育もそれに当てはまるであろう。米国などでは17歳で大学を卒業したとかいう話は良く聞くが、実は彼らのその後については、それほど大成していないと言われている。そのステージに応じて学ぶべきものがあるとするなら、飛び級にしても少々はともかく余り騒ぐほどのことではないのではなからうか。

子供は子供らしく、大人は大人らしくならねばならない。この「らしさ」をもう一度真剣に考えてみる必要が今の危機的な社会にはありそうである。

人間は、子供の頃の記憶は殆ど生涯にわたって忘れないものである。だから若い時に基本的なことを教えて、応用が利くようにしておけばよい。しかしその若い時に、先端のことばかり、あるいは目先のことばかりを教え、深層部分にそれだけを覚えていたらどうなるのか。先端の話は基本ではないから必ずすぐに旧式になる。つまりすぐに殆どが不要なものになることだけを必死に詰め込んでいたら、年をとるにつれ、頭の中は殆ど役に立たないもので満ち溢れているか、もう何もかも忘れてしまいたいということに身体が反応してしまうのではないだろうか。倫理観も入れる間もキャパシティーもなく、欠如するとなれば、恐ろしい社会が将来実現する。

東南アジアの小さな村の社会を訪ねていくと、人の



良さに何時でも何処でも驚かされる。あるいは日本に  
来ている真面目な留学生たちと接していると、歳で歳  
もろくなるせいかも知れないが態度や会話の中で人間  
の素晴らしさを見せられ、涙が出てくることもある。  
反面近代化されて何もかも立派に整えられている社会  
でのわれわれが人間的にはお粗末で恥ずかしい。何故  
近代化の向かうところが希望の光だと言えるのであり  
うか。確かに彼らから見れば、それは光でも、もうわ  
れわれにはそうは見えなくなっている。何かを得たら、  
何かを失う。そのことに気づき始めているのが21  
世紀であるならば、鋭角的でなく、彼らを出し抜くの  
ではなく、彼らと一緒に、行動しなければなら  
ない。人生に立ち足るあらゆる困難を想定して、  
その基本に必要なもの、それを見る眼を養うための素  
地を作る子供の時、大人ぶってどうするのだろうか。

幅広く知れば知るほど、心豊かにあろうとすればす  
るほど、繊細な心を持つ人間というのはデジタル反応  
は恐ろしくて出来ないし、しないものであり、当然控  
えめであるはずである。今の世の中は出来ることと、  
やって良いこととの分別が全く効かなくなっているの  
ではないかと思う。この分別こそこれからの時代の人  
間性に求められることではないだろうか。博物館は常  
に歴史や文化をなぞって、過去を振り返り、自問自答  
して分別を獲得するに最もふさわしい場である。

私は以前、日本博物館協会の『博物館研究』3月号  
(2001年)に「博物館のとらえる時代の境目」という  
一文を載せた。曲がり角に立つ博物館が時流の中で自  
分を見失わないことこそ生きる道ではないかという観  
点から次代へ伝え残したいこととして、将来を少し予  
言している。興味があったら読んで欲しいが、時流と  
いうのは、常に良い面だけを並べ立て、悪い面を隠し  
て突き進む癖があるのである。それを見抜く眼を持ち  
たい。30年間文化のステージに身を置き、考えたこと  
の一端を少しでも次代へ伝えておきたいと思うのであ  
る。



(右写真の説明)  
英田郡内のマスジと呼ばれて  
いる場所

## 只今準備中

### 特別展 他界への招待

～お化けはきつという・あの世はきつとある～

平成15年8月1日(金)～8月31日(日)

かつて人々は自分たちの力ではどうにもならない恐  
怖や病気、天変地異などに遭遇すると、何か超自然的  
な存在を生み出し、それに結びつけて説明づけようと  
しました。そのようにして生み出されたお化けや呪  
い、あの世などは、現在の科学では否定されながら、  
それでもなお決してなくなることなく語り継がれてい  
ます。なぜならその中にわれわれ日本人にとって普遍  
的な何かがあり、それを今でも必要としているからだ  
と思われまふ。そこでこの特別展ではかつての日本人  
が生み出したお化けや呪い、あの世などについて展示  
し、考えてみたいと思います。

一つ例を挙げますと、岡山県内に広く分布し、非常  
に特徴的なものの一つにマスジがあります。魔筋・ナ  
メラスジ・ナメマスジなどと呼ばれ、妖怪や魔物が通  
る道だと言われています。マスジのうえに家を建てて  
はといけないとされ、その道を通ると何かに取り憑か  
れたり、何かの後をつけてきたりするとも言われてい  
ます。全国的にも岡山が非常に特徴的ですが、  
現在ではほとんど語られることもなく、その場所も忘  
れ去られようとしています。

いったい人々はなぜマスジを生み出したのでしょうか。  
実際にマスジを展示するわけにはいきませんが、  
その中身を探ってみるのもわれわれ日本人を知る一つ  
のアプローチになるかもしれません。

(学芸員 木下 浩)





## 平成14年度の さまざまな取組から

県立博物館では、博物館内部のしくみや学芸員の日常の仕事を理解してもらうため、さまざまな取組を行いました。14年度は中学の職場体験学習や大学の学芸員実習などの機会を通じて、中学生や大学生に博物館での学芸員業務を経験してもらいました。その時の感想文を一部紹介します。

「先日はお忙しい中、私達の職場体験のために色々とお世話いただきありがとうございます。色々な事ができて楽しかったです。また、後楽園で写真をとることができ、おもしろかったです。私の知らない所で学芸員の人がいろんな仕事をしている事や仕事がとても忙しい事を知りました。」(竜操中学男子)

「今まで、言葉だけの知識でしかなかったものが、2日間の実習を経験したことによって明確な知識になったように思います。」(就実大学実習生)

「学芸員には、物と向かい合う粘り強さ、興味・関心を持つこと、資料に対する愛情が必要だと思った。何よりも調査・研究に熱くなれるとよいと思った。たった2日間の実習であったが、私も少し熱くなりかけた。」(就実大学実習生)

また、14年度後半からは出前講座で学芸員が県下の小中高校に出かけ授業を行う事業も実施しました。総合的な学習の一端を専門的な知識を有する学芸員が担うというもので、15年度も引き続きこの事業を継続して行います。(主査 貝原 靖浩)

## 資料あれこれ

### 三村親宣の感状

写真の文書は、毛利方に属していた三村親宣が、配下の山下牛助にあてた感状です。三村親宣は、三村家親の弟親成の子で、三村元親の従兄弟にあたります。親成・親宣父子は、三村元親が毛利方を離反した際元親に従わず、毛利方に属していました。この文書を読み下すと、次のようになります。

この度羽柴の陣において夜打・太刀打を致すの段、比類なく候、祝儀のため太刀一腰・青銅百疋進らせ候、いよいよ忠儀を抽ずべく候、恐々謹言、

天正10年(1582)の羽柴秀吉による備中高松城攻めの際、山下牛助が高松城に籠城し、羽柴陣へ夜討ちなどをかけ活躍したことを賞した内容です。高松城水攻めの様子を伝える貴重な史料です。また、この古文書は当時の姿を残している点でも貴重です。斐紙風の切紙(9.5cm×21.2cm)を本紙とし、包紙も当時のままです。どの種類の紙をどのような形態で使用したかは、文書の発給者と受給者との関係を考える上で今後重要になってくると思います。その意味でもこの文書の持つ情報は貴重なものになります。

(学芸員 横山 定)



三村親宣感状(本館蔵)

## 岡山県立博物館

## 平成15年度のスケジュール

- 6月3日(火)～6月29日(日)  
特別陳列「大飛鳥遺跡」
- 7月1日(火)～7月27日(日)  
特別陳列「名物裂」
- 8月1日(金)～8月31日(日)  
特別展「他界への招待  
～お化けはきつといる・あの世はきつとある～」
- 9月 博物館講座

- 10月10日(金)～11月9日(日)  
特別陳列「備前焼の土型」
- 2004年1月6日(火)～1月25日(日)  
特別陳列「国宝赤韋威鎧と太刀一文字(山鳥毛)」
- 1月30日(金)～2月29日(日)  
特別展「動乱と変革の中で～岡山の幕末維新～」

### 岡山県立博物館だより 第59号

- 発行日 平成15年5月31日
- 発行者 岡山県立博物館 館長 松井新一

〒703-8257 岡山市後楽園1-5  
TEL(086)272-1149 FAX(086)272-1150  
[URL]http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kenhaku/hakubu.htm



古紙回収率70%再生紙を使用しています